

第5章 サービスを構築する3つの機能

第4章で定めたコンセプトと3つの方針を実現するため、以下の3つの機能を検討します。

- ・新たな本との出会いを促す誘発機能
- ・多種多様な知や人とつながる交流機能
- ・空間や自然などを感じながら様々なことが学べる体験機能

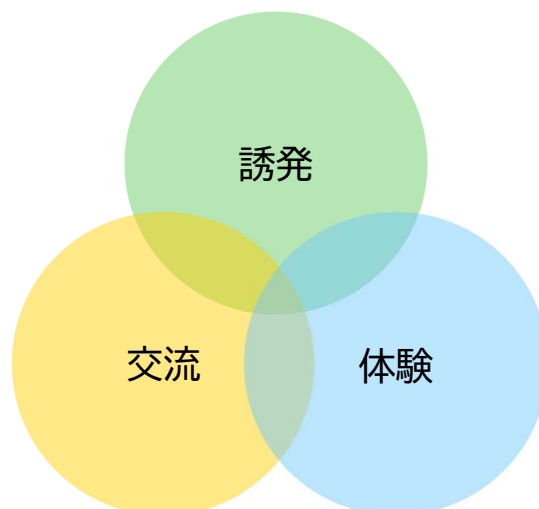
これら3つを柱として、北海道大学の構内に立地するという独自性も活かした「(仮称) こども本の森」におけるサービスを構築します。各機能が相互に連携することで、一体的に学びを深め、子どもの読書への関心を高めていきます。

コンセプトに基づく3つの方針

本との出会いから、世界への好奇心と想像・創造力を育む
多種多様な知や人とつながり、学びを深める
魅力ある空間や豊かな自然の中で、読書に没入する



コンセプト実現のための3つの機能



1 誘発機能

(1) 選書・配架

本施設は、子どもたちが普段手にする機会の少ない本との新たな出会いを促し、子どもの自由な感性や好奇心のままに本を手にとることのできる場所です。

そのため、同じテーマの中に、絵本、図鑑、文学、画集、外国語の本などを並列に並べ、大人が読む本も含みながら、テーマに沿った多様な本を選書し、配架します。

ヒアリングでは、ビジュアルで内容が伝わる写真集、自身では気軽に購入できない本、学校の授業で教わらないことや人生に行き詰まった時にヒントが得られる本を置いてほしいという意見や、自然についての知識が得られる、地域の歴史を知ることが出来る、大学と連携するという、この場所ならではの意見がありました。

本施設ではこうした需要や特性も考慮し、選書を行います。また、北海道大学附属図書館や学生、研究者によるお勧めの本なども選書、配架することを検討します。

そして、今回のヒアリングで得られた視点に留まらず、開館後も時代や文化の変化を的確に把握し、様々な本やジャンルを通して新たな出会いを提案していきます。

(2) テーマとして添えられる言葉の吟味

選書テーマの名称設定は、利用者の目線に立ちながら設定を行います。汎用性のある言葉で NDC（日本十進分類法）をベースとしたオリジナルの分類をつくるなど、分かりやすく利用者に伝えます。

テーマ名の例

大テーマ | 自然

中テーマ | 素敵な数学

小テーマ | 数学者からの風景

ヒアリングからは、本棚を通して大学の各学部・学問への繋がりを表すことも、子どもの好奇心や知識欲を刺激することに寄与するのではないかという意見が寄せられました。北海道大学の学部とリンクするジャンル分けも加えるなども検討します。

(3) 「気が付いたら本を読んでいた」をもたらす環境の創出

時間の奪い合いが激しい現代社会では、「手に取る」「読み進める」という2つのハードルを越えなければ、新しい本との出会いを促すことが難しい状態です。そのため、どのように来館者に本の中の世界に触れてもらうのか、どのようにきっかけをつくるのが重要です。本を身近に感じられ、様々な本に興味を持ち、「気が付いたら本を読んでいた」という瞬間を創り出すための下記のような環境整備を検討します。

【本と出会うきっかけをつくる環境整備】

- ・訪れたいくなる素晴らしい建築や周辺環境
- ・魅力的な本棚、視覚に訴えかける配架方法、手に取りたいと思う美しさの創出
- ・テーマを分かりやすく伝えるサインの掲出
- ・施設内での様々な読書環境の創出や、家具の工夫
- ・本の中の印象的な言葉の掲出など、本そのものの魅力を伝える工夫
- ・先端のテクノロジーを用いた新たな本との出会い等
- ・遊びを通して気づきを誘発する仕掛け

2 交流機能

(1) 大学に集まる多様な人との交流機能

北海道大学の有する多種多様な知や人とつながるため、子どもたちと大学、そこに集う学生を結ぶ交流機能を持たせます。

子どもたちに大学という学び舎を存分に感じてもらうことができるよう、大学施設内を見学できるプログラムの実施や、大学で行われている研究成果発表の場として施設を活用する、施設内で公開授業を実施するなど、大学と連携したプログラムの実施を検討します。

また、大学生が気軽に訪れやすい施設にすることで、子どもが大学生と触れあえる、大学生も子どもと学びあえるなど、知との触れあいや学びあいの交流を創出します。

そして、開館準備の段階から、配架作業等で施設づくりに参加する機会を設けることなども、本施設と大学生を繋ぐ一つの方法であると考えます。

交流機能を実現するための大学との連携は、継続的な運用が必要です。運営側も連携担当スタッフを配置するなどの組織体制づくりや、学生が運営に参画する仕組みの検討など、他の大学との連携も視野に入れながら、ともに施設をつくっていきます。

(2) 市立図書館・学校との連携の場

本施設で本と出会い、それがきっかけで読書の魅力を知った後、日常でも読書に親しむ時間をつくる、その習慣化の促進のために、より身近な存在である市立図書館や学校との連携が必要です。

そのため本施設と、中央図書館や地区図書館などの他の市立図書館とのネットワークを構築し、本施設での企画選書や棚づくりの共有や、入れ替えが必要になった図書の移管などを検討していきます。

また学校と連携し、本施設を児童生徒の校外学習の場として活用してもらえよう、学校等の団体訪問を受け入れる取組などを検討し、本の新たな魅力に触れる機会を創出します。

市立図書館や学校と、本施設での取組も含めて連携を図ることで、児童生徒に向けたサービスにおけるさらなる新しい観点や発想のきっかけをつくり、サービス向上に貢献します。

3 体験機能

(1) 自然を活かした体験機能

施設の周りにある豊かな自然を活かして、子どもたちが様々なことを感じ、学ぶことのできる体験機能を持たせます。本を施設の外に持ち出し、大学構内の自然に囲まれながら読書をしたり、植物、虫、動物の自然観察など、子どもたちが五感全てを使って自然を感じる体験を通して、読書の楽しみを実感し、また本が読みたくなる環境づくりを検討します。

(2) 学びのプログラム

交流機能・体験機能を実現し、子どもたちが自然や北海道大学の多種多様な知に触れ、体験できる機会を総合的に推進する取組として、「学びのプログラム」の実施を検討します。

北海道大学が有する自然環境や総合博物館などの施設、知見や人材に合わせて、ワークショップや科学実験など、施設の内外を活用したプログラムを行うことにより、もっと知りたい、やってみたいという好奇心を刺激し、子どもたちがわくわくしながら学べること、大学生や大人も含め、ともに学びあえることを目指します。さらに、各プログラムのテーマや、そこから派生する事柄を抽出し、関連展示の実施やブックリストの作成を通じて、学びを深めます。

このように、様々な資源や人が携わることで、広く多くの方の利用を誘発し交流を促すとともに、子どもたちが実際に、楽しみながら様々な体験や創造ができる場をつくります。

図 5 学びのプログラムのイメージと内容例

×月×日(月)15:00～17:00 火のおこし方	×月×日(土)13:00～15:00 ミステリー作品 読書会	×月×日(水)11:00～12:00 ハイブリットロケット 打ち上げ実験	「虫と野菜の関係」レクチャー&実践 ●殺虫剤や化学肥料を使わず、昆虫と野菜が助けあいながら成長して、菜園に恵みをもたらす方法などをレクチャーし、その共存共栄を専用の農園で実践 ●こどものにわ、畑（農学部との連携、自然が体験できる庭や野菜づくり）等
×月×日(木)16:00～17:00 土壌について学ぶ	×月×日(火)11:00～12:00 ラブレターの書き方	×月×日(土)13:00～15:00 くまの生態を知る	
×月×日(日)13:00～15:00 虫と野菜の関係	×月×日(月)13:00～15:00 定規とコンパスで 挑む数学	×月×日(日)9:00～12:00 チーズを作る	

こうした交流機能・体験機能を継続していくためには、大学生に運営やイベントの企画・開催に携わってもらうことが必要であることから、研究フィールドとして施設を活用できるなど、大学生にとってのメリットを生み出しながら、北海道大学と連携して取り組んでいきます。

第6章 運営内容

第5章に記載した、サービスを構築する3つの機能を実現するため、次のとおり「(仮称) こども本の森」の具体的な運営内容を検討しまとめます。

1 蔵書

これまでつくられた「こども本の森」は、約1万冊から2万冊程度の本を所蔵しています。図書館としてはそれほど多くない蔵書数ですが、一冊一冊の魅力を惹きだす見せ方や、壁一面に本の表紙を見せた誰もが目を惹く配架（面陳）により、圧倒的な本の世界に囲まれる体験を創出しています。

また、自然と本を手に取りたくなるストーリー性のあるオリジナルの分類や、それに伴った厳選された棚の編集を行うためには、量ではなく質的な充実が必要となります。

本施設においても、この考え方のもと、1.5万冊程度の中で設計内容と調整しながら蔵書数の検討を進めていきます。また、図書の収集にあたっては、購入だけでなく、広く本の寄贈を呼び掛けます。

なお、施設を訪れた子どもたちがいつでも新たな本と出会えるよう、貸出は行わず、館内での閲覧を原則とします。

2 利用方法

これまでにつくられた「こども本の森」は、9:30~17:00または17:30の開館時間が設定されています。これは、遅くまで勉強や調べものをする場所ではなく、日中に読書やその美しい空間を楽しむ場でもあるからです。

また利用にあたっては、一人ひとりが集中して本と向き合ってもらうための時間を過ごしてもらうことを踏まえた予約定員制や、予約不要の入館枠を設けるなど、開館後の状況に合わせた柔軟な運用を行っています。

本施設においてもこれらを参考に、主な利用者として想定する小中学生を中心とした子どもたちの利用を最優先としながら、その保護者や北海道大学の学生・研究

者、教育関係者などにも施設に親しんでもらうことができるよう、開館時間や利用方法を検討していきます。

3 求められる人材・能力と運営手法

(1) 求められる人材や能力

本施設の特長を考慮し、運営においては以下のような人材や能力が求められます。

ア 独創性のある選書能力

「誘発機能」においては、利用者が新しい本と出会う機会を提案すること、多様なジャンルにわたる客観的な広い視野と、それを適切に分類する能力が必要となります。

本を手にとってもらうきっかけをつくるための分類を創造し、子どもを子ども扱いしない柔軟な観点や、新たな本との出会いを生む独創性ある選書により、棚を通して一冊一冊全ての本の魅力を利用者に伝える力が求められます。

イ 外部組織との調整能力

「交流機能」「体験機能」を実現するためには、多くの大学生に、準備段階から運営に参加してもらい、また、学生自身の研究や活動のフィールドとしても活用してもらうため、様々な場面で、大学や大学生と連携することが必要不可欠です。

また、市内図書館だけでなく、学校図書館との情報共有を活性化させることで、子どもたちの一番身近にある読書環境の向上に貢献するためには、市内図書館内での調整や推進力も必要となります。

本施設の運営においては、これらを進めるために、内外の多様な関係者に対し、円滑に交渉や調整を行える能力を有した人材が求められます。

ウ ホスピタリティの精神

子どもたちに本に出会うきっかけや、感動を与えるためには、人に感動を与えることそのものに喜びを見出し、追及していくことが必要となります。また、

子どもと接する上で、考え方やアイデアを肯定することや、一緒に伴走するなどの思いやりも必要です。それは日常的な利用者との接し方の一挙手一投足にも表現されている必要があります。

この場での本との思わぬ出会いを体験してもらうためには、「またここに来たい」と感じてもらえる接遇・応対が求められます。

エ デザイン及び広報のスキル

施設ロゴやサイン、グッズ、制服なども利用者とのコミュニケーションツールの一つであり、「(仮称) こども本の森」という施設を認識し、信頼感を高めるための要素です。本施設が掲げるコンセプトや意図を視覚的に伝達し、利用者へメッセージを伝える必要があります。そのためには、本施設全体の特別な価値やコンセプトをよく理解し、それに沿ったデザイン性の高いサインやチラシなどを制作できる創造力が必要となります。

デザインのスキルだけでなく、広報業務においては様々なメディアや SNS を活用し施設の魅力や特長を伝える情報発信能力、外部調整を行うための円滑なコミュニケーション能力、広報活動の戦略を検討する分析能力等も必要です。

(2) 運営手法

コンセプトやサービスの実現及び求められる人材・能力を踏まえ、運営手法を検討します。

本施設の特長を活かすためには、各々が主な担当業務を分担することで質の高いサービスを提供していく体制が望まれます。このことを前提として、直営の場合と民間の能力を活用した場合のメリット・デメリットを、表 2 のとおり整理します。

表 2 運営手法のメリット・デメリットの比較

	メリット	デメリット
直 営	・市の意図の運営への反映 …市の方針や目的が運営に直接取り入れられるため、市の意図が反映されやすく、市民のニーズに合わせたサービスや、市全体の政策と関連した方向を打ち出しやすい。 ・地域や学校との連携 …地域の生涯学習施設や学校との連携体制が構築しやすい。	・迅速性・柔軟性の問題 …民間事業者のように迅速かつ柔軟な対応が期待しにくい場合がある。特に新しいサービスの導入や運営方法の変更において、制約が多くなる可能性がある。 ・効率性の問題 …市職員が直接運営に関わるため、特定の専門知識や技術が必要な場合、効率的な業務運営が行われない可能性がある。
民 間	・民間企業のノウハウの活用 …民間企業の知識や技術等のノウハウを活用することで、効率的な運営や創意工夫が期待できる。 ・専門人材の柔軟な活用 …専門的な知識やスキルを持つスタッフを柔軟に配置できるため、効果的なサービス・運営が期待できる。	・運営のノウハウの非蓄積 …運営のノウハウが市に蓄積されない。また、運営者が変更となる可能性があることから、ノウハウが継承されない可能性がある。 ・地域の特性に合わない運営 …運営者が地域の特性を理解せず、適切なサービスを提供できない場合がある。

ア 直営の場合

直営の場合のメリットは、庁内調整等が円滑であることや、地域をよく知るサービスを実現できることが挙げられます。一方、本施設に求められるサービスの実現に当たっては、独創性のある選書・配架、高いホスピタリティ、広報・グッズ等の高いデザイン性が必要な業務等、様々な場面で習熟したスキルや知識が必要となりますが、このようなノウハウを持つ人材をどのように募り組織化するかに課題があります。場合によっては、業務の一部を外部に委託することも考えられます。

イ 民間の場合

民間の能力を活用した運営（指定管理者制度⁶）の場合、労務・総務・経理等の管理業務は、本社の管理部門等が支援することで、軽減されることが考えられます。また、独創性のある選書、高いホスピタリティ、広報・グッズ等の高いデザイン性が必要な業務について、それぞれの分野に特化したスキルとノウハウをもった、即戦力となる人材を、多種多様な業界から募り、柔軟に配置できる組織づくりを行えるメリットがあります。これらは結果的に、運営の効率化にもつながります。一方、直営の場合と比べ、地域に根差したサービスを実現できるかどうかや、ノウハウの継承等の課題があります。

上記の「ア 直営の場合」と「イ 民間の場合」におけるメリット・デメリットの比較を踏まえ、本施設の特長を活かし、コンセプトや求められるサービスを実現するため、民間の能力を活用した運営（指定管理者制度）を検討します。

ただし、事業者には、スキルやノウハウだけでなく、札幌市の地域性やこれまでの図書館運営に対する理解が求められます。その上で、本施設のコンセプトや役割を十分に把握しながら運営やサービスに反映し、本施設独自の価値を創出していける適切な事業者を選定することが重要です。

⁶ 指定管理者制度 普通地方公共団体が住民の福祉を増進する目的をもってその利用に供するための施設の管理を他の団体に行わせる仕組み。

4 開館準備

円滑に開館を迎えるため、選書、広報等が必要となる開館準備期間から十分な体制をつくる必要があります。

また、本施設の特長を踏まえ、開館準備に際して主に必要となるものを以下に記載します。

①本に係るもの

- ・ 収集方針及び独自テーマの作成
- ・ 選書・発注
- ・ 寄贈本の募集・受付・仕分け
- ・ 本の装備
- ・ 蔵書管理システムへの登録
- ・ 配架

②サービス計画に係るもの

- ・ 利用者向けサービス内容の検討
- ・ 開館後実施するイベントや「学びのプログラム」の企画・検討
- ・ 北海道大学や市立図書館・学校図書館との連携体制の調整・検討
- ・ 来館予約システム

③家具・備品に係るもの

- ・ 家具選定（建築に沿ったデザイン性の高いもの）
- ・ テーマ掲出のサインの作成や棚番号の考え方などの検討
- ・ 面陳用ブックスタンドの検討
- ・ 高書架における落下防止対策の検討

④広報、グッズ、デザインに係るもの

- ・ 施設名称の決定
- ・ ロゴ、ホームページ、サイン、制服、グッズ等のデザイン、制作の検討

⑤その他

- ・ 組織体制構築・研修計画
- ・ 名誉館長の決定
- ・ 開館時のセレモニーイベントの開催 など

5 寄付金の募集

三者での基本合意書において、本施設の開館及び運営等に要する費用については、寄付金によって賄えるよう、協力して募集することとしています。

本施設を将来にわたって、未来を担う子どもたちの学びと成長の場として運営していくため、ふるさと納税などの制度も活用し、広く寄付金を募集していきます。

第7章 施設諸元

1 名称

(仮称) こども本の森

札幌市図書館条例の改正を予定。

2 開館予定日

令和8年(2026年)夏頃

3 所在地

札幌市北区北8条西6丁目

北海道大学構内 南門付近



4 構造(予定)

鉄骨造 地上1階

5 延床面積(予定)

約 350 m²

第8章 今後のスケジュール

表3のとおり今後のスケジュールを想定します。令和8年夏頃の開館に向けて、各種準備を進めていきます。

表 3 開館までのスケジュール

	R6（2024）年度												R7（2025）年度												R8（2026）年度					
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	
安藤忠雄 建築研究所	基本設計・実施設計等												本体工事												外構工事					
札幌市													施設名 決定		寄贈本 募集												夏 頃 開 館 予 定			
	独自テーマの作成・配架計画の検討等												選書・図書購入												図書配架					
													寄附金募集（ふるさと納税等）																	